

ミニ講義
「アセスメント --アセスメントに役立つ諸理論--」

対象者理解を深めるために



代表 上 原 久

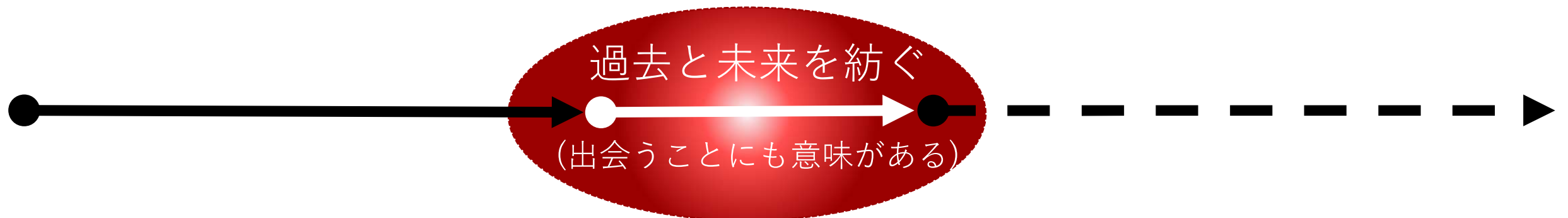
「対象者理解を深める」とは...

「対象者（事例）理解を深める」とは...

連綿と続く人生のなかから、事例が生きぬいてきた過去の出来事や、
今ここで課題になっている事象に焦点をあてながら、

「事例が歩んできた足跡」と「これから拓かれる未来」の間に、

「意味深い物語」を紡ごうとする営みです。



「対象者理解を深める」ことの前提として...

基本的に...

「相手を理解する(解る)ことは不可能である」という前提を置く。

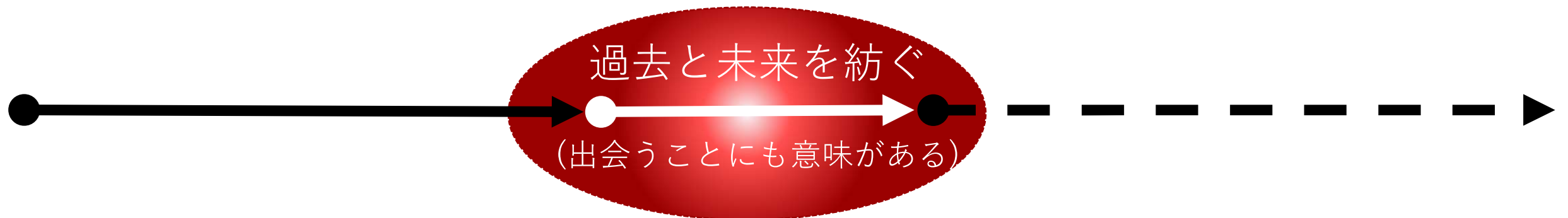
- ①解らないからこそ、解ろうとする
- ②自分の体験と相手の体験を重ねて考える
- ③支援者の経験智を最大限に活用する

総体的な営みを通して、対象者理解を深め「見立て」の確からしさを増していく

*対象者理解は「How to」によって学べる(身につく)ものではありません

「見立て(アセスメント)」とは...

- 【1】 現状の査定（何が起きているのか）
- 【2】 背景の理解（そうなった経緯や背景は何か）
- 【3】 主要テーマの把握（根底に流れるテーマは何か）

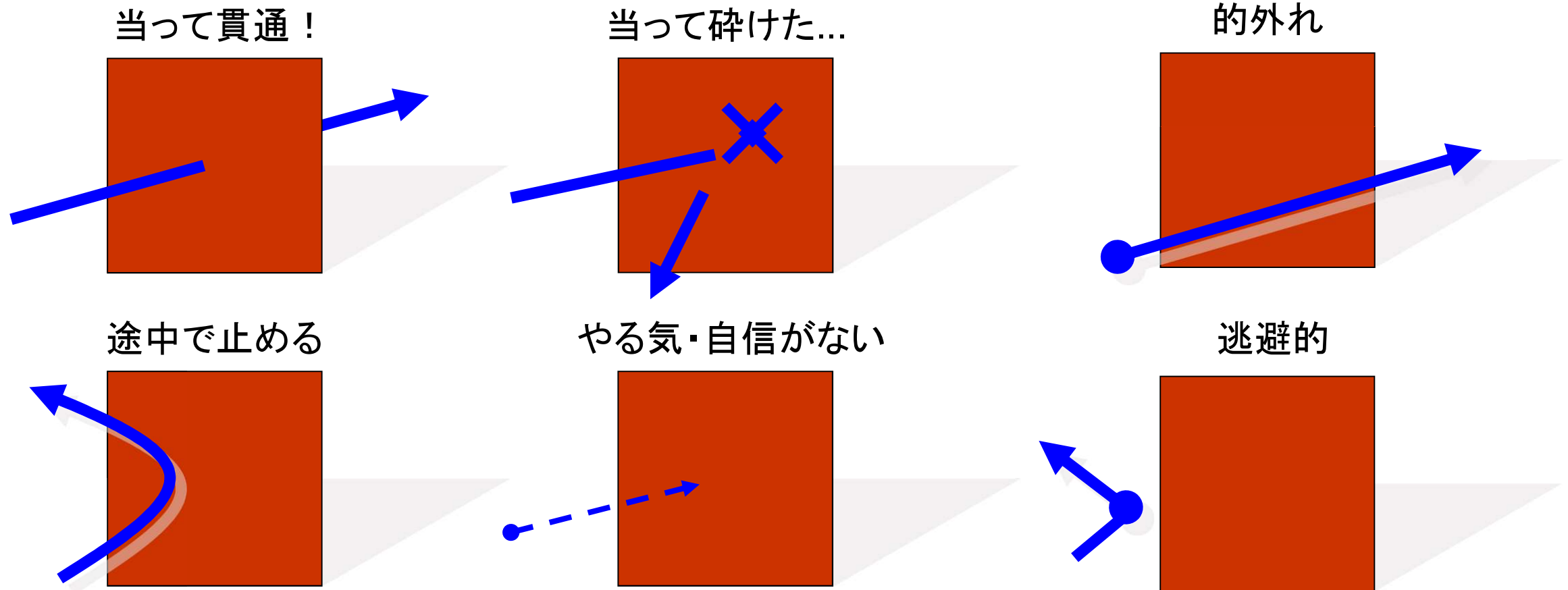


見立てに役立つ知識



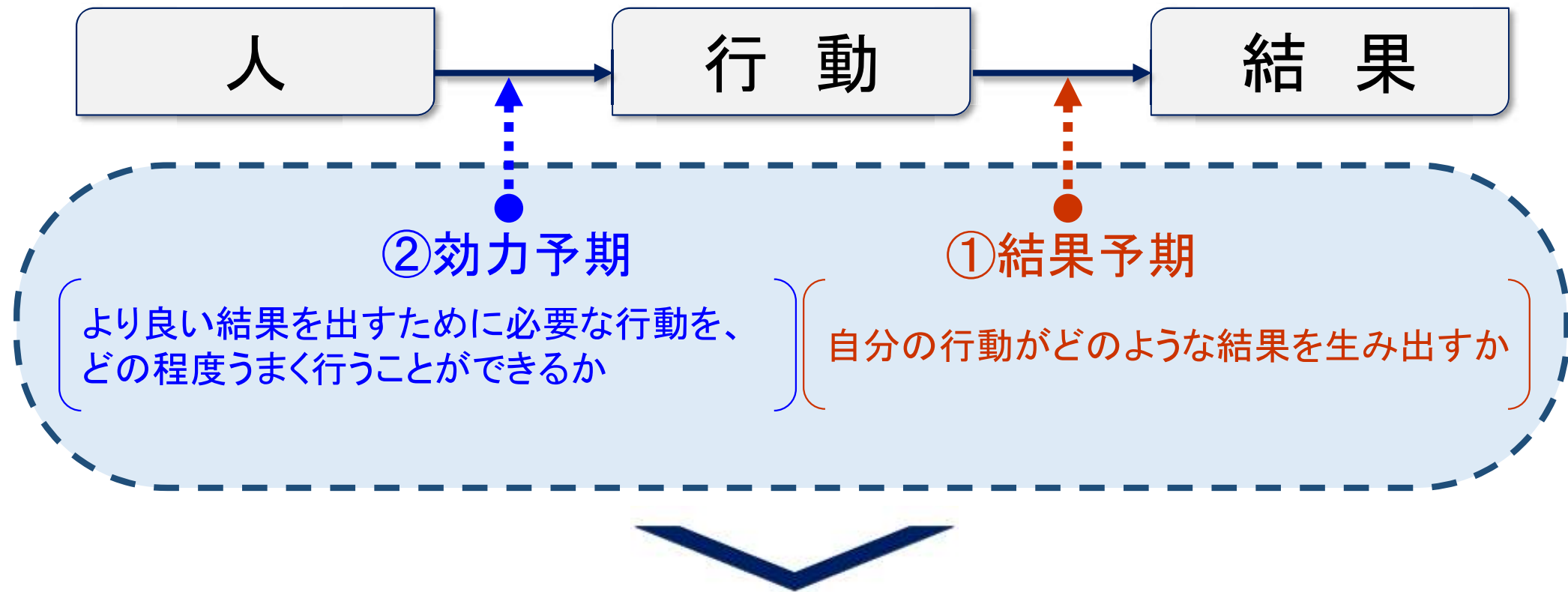
「反応パターン」と「反応スタイル」

→スタイルorパターン、■ 課題



反応パターンの反復・反芻（はんすう） → 反応スタイルの形成

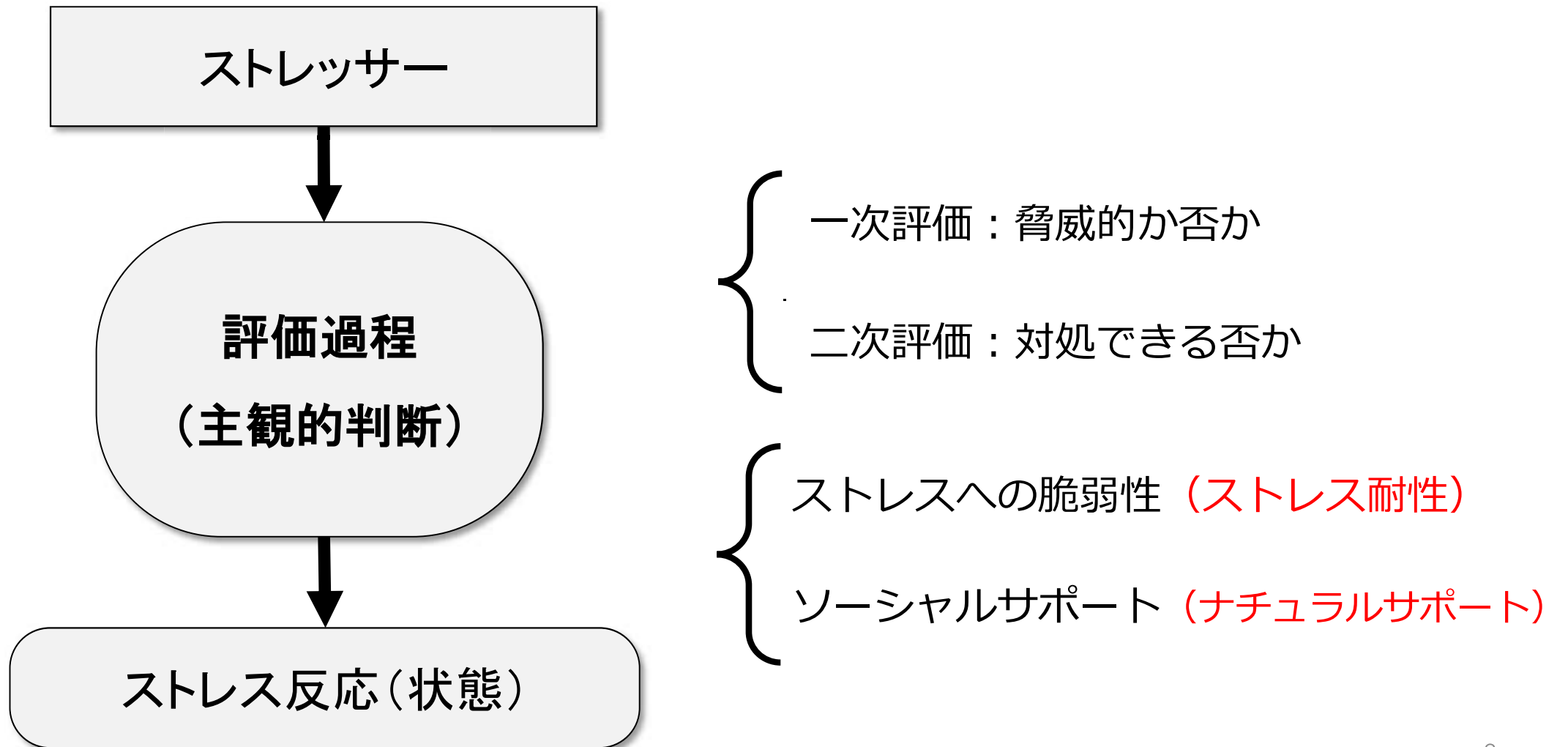
自己効力感:2つの予測…「結果予期」と「効力予期」



「自分はここまでできそうだ…」という信念 【 自己効力感 = ①結果予期 × ②効力予期 】

ストレス反応

「ストレス」: 何らかの刺激によって引き起こされる生体反応



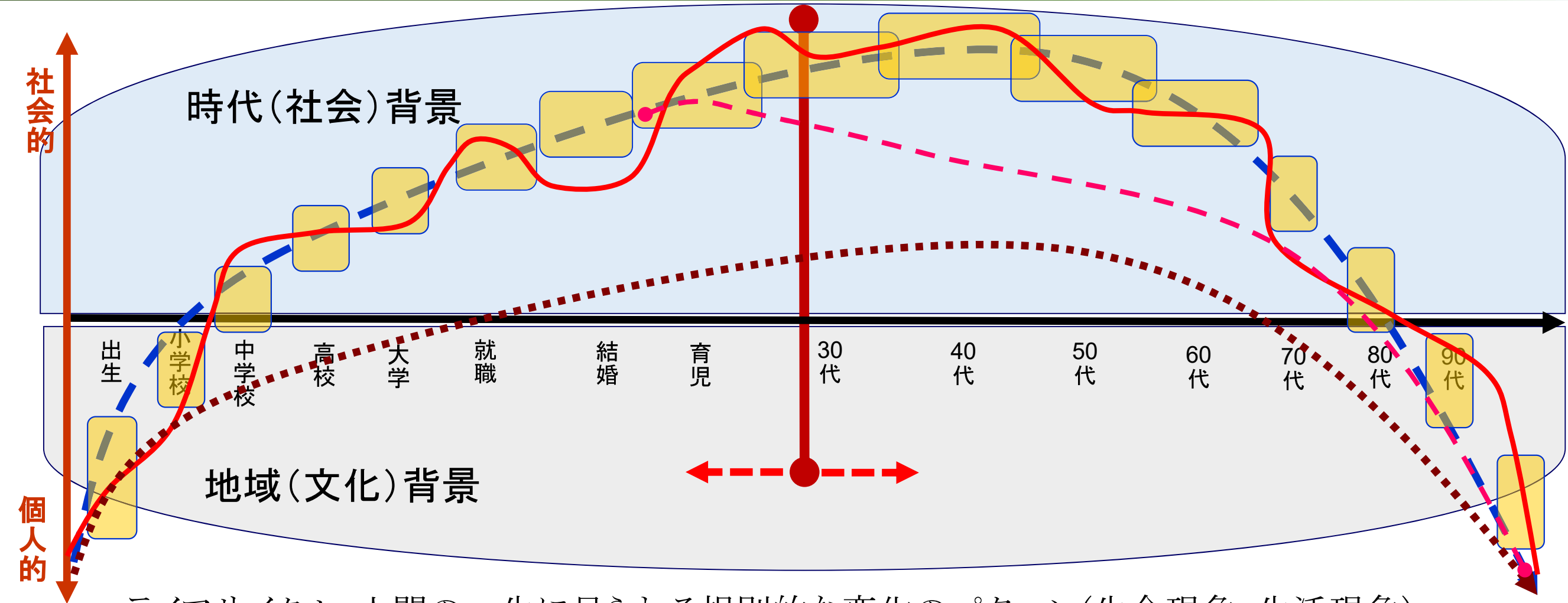
配偶者の死を100とした場合のストレス値

No.	ストレスとなるライフイベント	数値
1	配偶者の死	100
2	離婚	73
3	夫婦別居	65
4	刑務所への収容	63
5	近親者の死亡	63
6	本人の大きなけがや病気	53
7	結婚	50
8	失業	47
9	夫婦の和解	45
10	退職・引退	45
11	家族の健康の変化	44
12	妊娠	40
13	性生活の困難	39
14	新しい家族メンバーの加入	39
15	仕事上の変化	39
16	家系上の変化	38
17	親友の死	37
18	配置転換・転勤	36
19	夫婦ゲンカの回数の変化	35
20	一万ドル以上の借金	31
21	借金やローンの抵当流れ	30

ストレス値＝エネルギーの度合い（Holmes & Rahe,1967）を改編

No.	ストレスとなるライフイベント	値
22	仕事の地位の変化	29
23	子女の結婚	29
24	親戚関係でのトラブル	29
25	個人的な成功	28
26	妻の就職・退職	26
27	進学・卒業	26
28	生活環境の変化	25
29	個人的習慣の変更	24
30	上司とのトラブル	23
31	労働時間や労働条件の変化	20
32	転居	20
33	転校	20
34	レクリエーションの変化	19
35	社会活動の変化	19
36	宗教活動の変化	18
37	一万ドル以下の借金	17
38	睡眠習慣の変化	16
39	家族の数の変化	15
40	食習慣の変化	15
41	長期休暇	13
42	クリスマス	12 ⁹

ライフサイクル、ライフイベント、ライフコースと発達課題



- ・ライフサイクル: 人間の一生に見られる規則的な変化のパターン(生命現象・生活現象)
- ・各ステージには、身体・心理・社会的な課題(発達課題: ライフイベント)がある。
- ・どのステージで、「誰と」「どんな出来事」に出会うかによって、人生(ライフコース)が変わる。
- ・ライフイベントの「結果の良し悪し」ではなく、焦点は「それにどう取り組むか」がポイント。

ケアシステム論

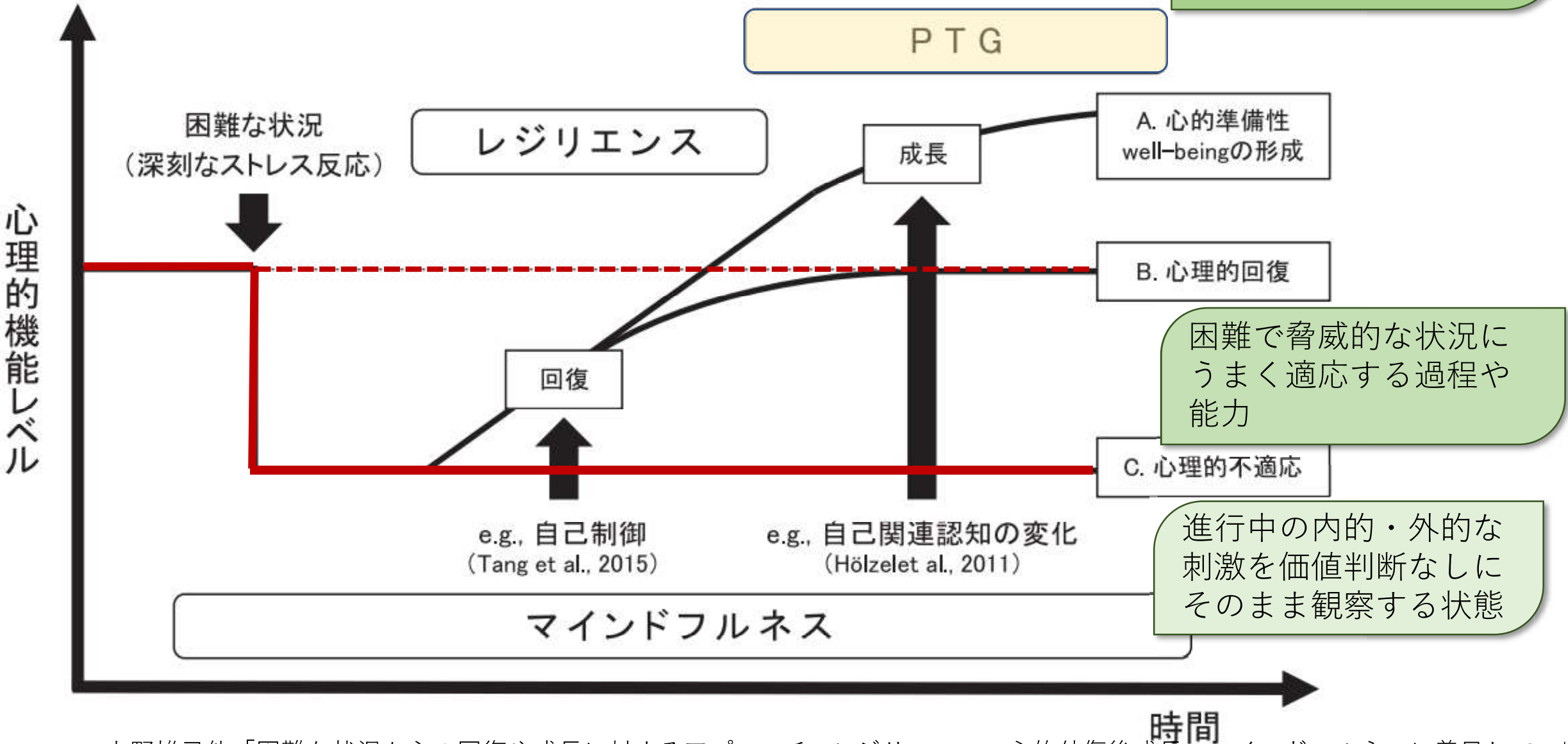


- ・「生活」は、ニーズを充足(ケア)しながら営まれている。
- ・ケアシステムは、①セルフケア、②インフォーマルケア、③フォーマルケア…の重層的な構造
- ・ライフイベント(出来事)の解決は、ケアシステムの充実度により異なる。
- ・ケアシステムが十分に機能しない場合、ニーズは満たされず、こぼれ落ちる。
- ・ニーズのあるべき姿:「どの段階で」「どのようにケアされるべきか」を把握する。

外傷後成長理論:PTG(Post-Traumatic Growth)

困難な状況からの回復・成長プロセスモデル：健康よりも更に高く

困難な経験に伴う精神的葛藤の結果生じるポジティブな心理的変容



上野雄己他「困難な状況からの回復や成長に対するアプローチ--レジリエンス、心的外傷後成長、マインドフルネスに着目して--」
心理学評論、vol.59、No.4、P.397-414、2016年に改変・加筆

まとめ

留意点1

- ①1つの理論だけに当てはめない。
- ②複数の理論が重なる部分に理解を深めるヒントがある。
- ③理論は1つの尺度であって、現実と完全一致するものではない。

留意点2

- ①上記①～③を前提にして、様々な可能性を考える
- ②支援者の体験(疑似体験・実体験)も動員する
- ③そのうえで、事例に対する理解を深める

- 【1】現状の査定（何が起きているのか）
- 【2】背景の理解（そうなった経緯や背景は何か）
- 【3】主要テーマの把握（根底に流れるテーマは何か）